



もらう、あげる、の繰り返し、人の絆を深める 冠婚葬祭で行き来するお金の意味

冠婚葬祭にお金のやりとりはつきものです。なかでも私たちが日常で経験するのは、やはり「葬」と「婚」。あわててインターネットで相場やマナーを調べた経験があるでしょう。それはともかく、お葬式や婚礼で交わされるお金にどんな意味があるのか、お話ししてみたいと思います。

香典は 自分を守るための米

香典というのは仏教用語で香奠とも書きます。文字の意味からいえば、仏教儀礼に参列する者が供える香料という意味です。しかし、実際の日本の葬儀では必ずしもそうではありません。では、香典とはどういう意味合いのものと思いますか？ 何かとお金がかかる葬式代、少しでも助けになれば？ 悲しみにくれている遺族へのお見舞い？ それもあるでしょうが、由来を探ると実はまったく違います。かつては、一俵香典とか一升香典といって、お米を持っていく例が多かったのです。

昭和30年代くらいまでは、葬式といえど地区ごとの住民たちの相互扶助で行なわれていました。村人総出で「死の処理」をしたものです。かつての農村の葬儀は近所づきあいが一番大事な絆でした。不幸があれば3日は手伝う。それがお互

いさまで、「葬式三日」という言葉も残っているくらいです。

不幸のあった家、死体というのは、強烈な死のケガレを発散させていると考えられていました。手伝うのはいいが油断をすると自分が自分につってしまふ。それに加え、死の匂いを嗅ぎつけて危険な邪霊や悪霊、魑魅魍魎ちみもろうりょうがたくさん寄ってきます。これらをなんとかしなくてはならない。そのときに大事なものは、命を守る最も強力なもの、それが「米」だったのです。

死者に枕飯や枕団子を供えておく、死んだ人の魂は迷い出ることなくそこにとどまり、死のケガレも邪霊も全てがそこに吸い寄せられてわるさをしない。そんな伝承が長く続きました。葬式に出かける人、手伝う人は、死者の家の竈の火で炊いたご飯を食べてはいけません。自分たちの命を守るため、生の世界のご飯を別に炊かなくてははいけません。だから古くは自分の食べる米を持参し、「別火」

などといって、喪家の近所の家の竈の火を借りて調理しました。この米の持ち寄りというのが香典の由来です。ただの食物では駄目。パワーのある「米」でないと、安心して死のケガレに触れることなんてできません。たびたびお話ししてきましたが、日本人の歴史の中では、白い米・白い餅は、命を守るためにはどうしても必要とされてきました。そしてお葬式というのは「食い事くひごと」。いまでも家族や親族の会食は必ずあります。

地域社会の人間ではない仕事上のつきあいの参列者が増えてくると、そういう人たちは食事などせず短時間で帰ってまいります。香典も米からお金に変わっていききました。高度経済成長期(1955〜1973)を境に、ほとんどがお金になりました。現在の香典は、旅立つ人への餞別や、お世話になりましたというお礼の気持ちの表現にもなりました。お米からお金に変わったことで意味も使いみちも融通がきくようになったのです。

邪霊を吸い付ける撒き銭 旅立ちの小遣い六文銭

香典以外にお葬式で登場するお金に「撒き銭」があります。葬送の行列が家を出るときに、貨幣を入れた花かごを振ってばらばらと撒きます。子どもや、ときには子ども以外も喜んで拾い集めます。これは死んだばかりでまだ危うい状態の魂を安定させるため。そして集まってきた魑魅魍魎を吸い寄せて離散りさん、拡散をさせないため。古くは米を入れたおひねりを撒いていました。米と貨幣というのは、ケガレを吸い付ける強力なパワーを持つという面で共通性があるのです。

もうひとつ葬儀に関係するお金がありますね。六文銭とも呼ばれる、死者に持たせるお金です。頭陀袋ずたぶくろに五穀と一緒に入れて副葬してきました。

中国の人びとは、あの世でお金に困らないようにと、冥銭めいせんや紙銭をたくさん持たせます。焼いてあの世の死者のもとに

届けるのです。冷蔵庫も車も必要、たとい
うことで、ミニチュアを焼いたりします。
ところが日本では、持たせるお金は単な
る旅の間の小遣い程度。よく三途の川の
渡し賃だと言い方もされ、この世と

あの世の境界を通過するための通行税み
たいなものです。あの世での死者の生活
費というものは送れません。これは文化
の違いです。世界中にはいろいろな他界
観念があり、欧米のように遺骨や遺体そ
のものを大切にすることがあります。ミ
イラなんか、最たるものですよ。こう
したことは宗教ではありません。日本各
地で行なわれてきた村をあげての葬儀も、
仏教でも神道でもなく、伝承された民俗
しきたり、ならわしなのです。

いわゆる技術革新が起こる前までは、
人びとはもっとこの世とあの世、靈魂や
魍魎魍魎のことを身近に感じていました。
何かおかしい、何かまずいというような
見えないうる感じが多かったので
す。農作物の不作や子どもの病気などが
あれば何か悪いものが依りついているの
ではないかと恐れ、それを祓うために米
や貨幣の靈力を借り、また祈禱師なども
頼みました。医療の進歩や、夜でも明る
い環境で、死への不安や恐怖も現在では
ずいぶん薄くなっています。

結納金は 保証金・契約金

春だというのに縁起でもない、葬式の

話ばかりしてしまいました(苦笑)。ごめ
んなさい。まあ、春は万物の再生のとき
というのでお許し願ひましょう。ここ
からはぱっと明るく、結婚の話に切り替
えます。

結婚で大きなお金が動くのは結納です。
嫁ぎ先から女性の家に金一封や反物など
も送られてきましたが、汎用性が高いと
いうことでやはりずいぶん早くからお金
が使われてきました。支度金であること
もに、家の労働力を奪うことへの見返り
という意味合いもあつたわけですね。優し
く働きの大事な娘を、ただでどこかの
男にやれるか、というわけですね。やは
りお金で、しかもかなりの額を包むとい
う伝統が長くありました。結納金は、保
証金・契約金みたいなものです。婚約破
棄すれば、3倍返しといった暗黙のルー
ルもありました。

ちよつと話はずれですが、「金襴きんらん緞子じゆんす
の帯締めながら、花嫁御察はなせ泣くの
だらう」、そう歌われたような、二度と
実家に戻れない結婚は、実はお見合いが
主流となった大正から昭和の初めのころ
だけのものでした。それ以前の農村では、
村内で、出戻りでも当たり前のようにな
らかな結婚が行なわれていたのです。舅
や姑とうまくいかなければすぐ実家に帰
りました。昭和40年代、まだ僕の若いこ
ろの民俗調査のなかでは、そんな話が四
国地方の山間部など各地でよく聞かれま
した。

嫁ぎ先とうまくいかず、「出て行け」
「出て行きます」となった場合、実家は
「狭い道で返してもらったら困る。広い
道で返してくれ」と言うんですよ。いま
で働いた分、田畑の1枚や2枚はつけて
返せというわけですね。そうすると娘はそ
れで今後食べていくことができる。そん
なふうには、民俗学を勉強していますと、
生きる権利を守ろうとする合理的なしく
みが、意外にもあつたんだということが
わかります。

話を戻しますが、婚礼もむかしは村を
あげて行ないました。米・酒が存分に味
わえるのは盆と正月と祭り、そして結婚
式と葬式くらいのものでした。ふだん儉
約して麦ごはんや雑穀や野菜をまぜたカ
テ飯でがまんして、そういう日の贅沢に
備えました。

かつては結婚の行列でもお菓子やお金
が撒かれました。こういう儀礼があると、
おめでたいものでも必ず魍魎魍魎がやっ
て来る。僕も子どものころに拾いに行き
ました。そのときの僕はつまり有家無家、
魍魎魍魎の一員だったのでしよう(笑)。
披露宴に呼ばれたらお金を包むとい
うのは、実は結婚式場やホテルで豪華な料
理がふるまわれるようになってからのこ
とです。かつての村単位の結婚式では、
近所の人たちはごちそうをつくるなど労
働力を提供して、お祝いをしていたので
す。

もらったら返すが 贈与の基本

さて、冠婚葬祭などの通過儀礼の現場
では、贈与・交換というシステムがあり
ます。フランスの社会学者、マルセル・
モースの贈与論の基本でいえば、もらっ
たらお返しをするという考えが、洋の東
西を問わず自然に備わっています。もら
う、あげる、を繰り返してこそお互いの
絆が深まっていくのです。誕生や
入学などのお祝いにも「内祝い」を少し
返し、入院中のお見舞いにも「快気祝
い」を返しますね。結婚の場合、新婦側
の家は、結納金を受け取ったらそれに見
合う持参金を用意します。



冠婚葬祭でもその他の機会でも、お金が儲かったときには周囲にご祝儀をふるまうなど、一人勝ちは許さないという意識は多くの社会にあります。あげたものはいつか自分のところに返ってくるという、互恵的な精神がしっかりと生きていました。僕が子どものころ、お祖父さんがよく言っていました。「お金は天下のまわりもの」、「お金は追いかけてはダメだ、追えば逃げる、放っておいても自然に回って来るものだ」そんな考えがむかしは生きていました。

金品の贈与の習慣として、婚姻と葬式では、家同士の絆、人間同士の絆を、今後も深めていこうという意思表示が込められていたという点で共通しています。しかし葬式の贈与というのは、死者に密着している喪家の家族や親族と、それを外から取り巻きながら葬式の手伝いで参加している地域社会の人びと、またその他の参列者が、一時的に一緒に共同の食事をして、無事に死者を送るための時間と空間を共有しようとしている、そのため資材や資金の提供という意味があったのです。

「ご飯」に寄せる 思いとは

冠婚葬祭での貨幣(お金)というのは社会の潤滑油でもあります。最近葬式でも、ケガレを祓うというよりこちらの役割のほうが強くなっています。けれどや

はり、お金には霊力が宿り、同等の強い霊力が米にも宿っているという感覚が日本の社会では一つの伝承として人びとの意識の中に刻まれています。小麦、イモ、トウモロコシなど主食となる炭水化物には、洋の東西を問わず共通の特別な精神世界があります。神事祭礼や人生儀礼における神饌や儀礼食についても、米は霊力、生命力を宿す穀物であるという考え方がうかがえます。

磐代の 浜松が枝を引き結び

真幸くあらばまた還り見む

有間皇子が詠んだ万葉集の歌です。無実の謀反を密告され、わずか18歳で中大兄皇子に殺されるのですが、その移送中に、自らの無事を願って引き結んだ松の枝を、運が良ければまた帰りに見ようという歌です。残念ながら見ることはできませんでした。その直前にあるのが、

家にあれば 筥に盛る飯を

草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る

という有名な歌です。古文の先生は「家では食器に盛ったご飯を、今は旅の途中だから椎の葉に盛るっていう歌だよ」とよく教えます。しかし、もっと暗示的な意味が詠みこまれているにちがありません。窮地に立っている有間皇子にとって、家での食器に盛る米飯は生命

の象徴です。椎の葉に盛る米飯は、たとえばお盆に無縁仏の供物を蓮や里芋、柿などの葉などに盛る例があるように、死者の象徴です。つまり、「自分はいま死出の旅路の中にいるのではないだろうか」という意味が込められているのです。米の奥深さがわからない人にはわからないかもしれませんが、米飯には生命の象徴、霊力の象徴としての長い歴史が刻まれているのです。そして、その米こそが貨幣(お金)と共通して冠婚葬祭でその役割を果たしてきていたのです。

変化し、 上書きされていく民俗

高度経済成長期以降、日本各地に伝承されてきた生活文化もいろいろと崩れてきています。冠婚葬祭も、近年はごくシンプルかつ合理的に行なったり、業者任せにする人も増えてきました。結婚を行う人も少数派になっています。考え方もかけるお金も、作法もさまざま。われわれ民俗学者はどう対応するかといえば、「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず」、変わるものは変わるものとして眺め、その変わり方、変わらなさに注目するのです。

科学や医学の進歩によって、近年では自然な生き死にということを考えることが少なくなり、自然界に対する感覚も鈍くなりました。以前、僕はフランスのパリでめずらしくのんびり過ごす時間がと

れ、サンジェルマン・デ・プレのカフェ・レ・ドゥ・マゴで、心の底から幸せを感じながらまったりしていました。するとふっと自分の死を考えたのです。みさんも仕事を離れ、浜辺でも山川どこかに行つてじっと静かに座ってみてください。ふと自分が死ぬということ、そしてどうなってしまうのかという不安と恐怖に襲われることでしょう。

そうした生死の必然を、ふだんの生活の中で考え、感じてきていた時代に行なわれていた「葬」や「婚」の民俗伝承が、いま大きく変容して新たな、機械化、超情報化、超高速化の現代社会における「葬」や「婚」になってきているのです。その中で何が変わり、何が変わりにくいのか、その伝承と変遷の読み解きをしていくのがわれわれ民俗学者の仕事なのです。



新谷尚紀 しんたに・たかのり

民俗学者。国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授、國學院大學教授。現在、國學院大學大学院と文学部で民俗学の後継者育成に努めている。「民俗学とは何か―柳田・折口・浜沢に学び直す」「氏神さまと鎮守さま 神社の民俗史」など著書多数。